



サンタもタクミも大ピンチ！？

12月に入り、街なかがイルミネーションで彩られる季節となりましたが、2025年のクリスマス商戦はかつてないほどの「冷え込み」を見せていました。株式会社インテージが12月12日に公表した調査結果は、流通・小売業界にとって衝撃的な数字を含んでいました。今年のクリスマスに「予定なし」と回答した人は54.1%に達し、過去最高水準を更新したのです。市場規模の試算値は7,274億円。これは前年比で約94%の水準ですが、2年前の2023年と比較すると、実に3分の2にまで縮小してしまった計算になります。かつては年末最大の消費イベントとして君臨したクリスマスに、一体何が起きているのでしょうか。データからは、物価高による「生活防衛」だけでは説明しきれない、日本人の消費価値観の構造的な変化が浮かび上がってきました。まず注目すべきは、予算の推移です。調査によると、今年の平均予算は1万6418円でした。昨年、大幅な減少を記録した水準から横ばいとなっており、回復の兆しは見られません。2023年には2万2,000円台だったことを踏まえると、ここ2年で消費者の財布の紐は極端に固くなりました。ここ数年続く物価高騰の影響は無視できません。実質賃金が伸び悩むなかで、生活必需品の価格は上がり続けて、消費者の間には「生活防衛意識」が完全に定着しました。かつては「せっかくのクリスマスだから」と許容されていた非日常への支出が、シビアな見直し対象となっているのです。しかし、今回の調査結果でより深刻なのは、単にお金がない

クリスマス 贈り物、パーティー、外出などイベント予定

という理由だけではない点です。予定がない理由として最も多かった回答は「興味がない」で、31.1%を占めました。これは経済的理由である「お金をかけたくない・節約したい」(16.2%)を大きく上回っています。つまり、クリスマスというイベントそのものが、時間や労力を割くべき対象でなくなりつつあるのです。

「予定なし」が過半数を超えたことは、かつて国民的・一大イベントであったクリスマスがその地位を失いつつあることを示唆しています。SNSなどで他人の煌びやかで充実した生活が可視化される現代、自身の生活とのギャップに疲弊し、あえて「何もしない」ことを選択する層が増えているかもしれません。



出典：インテージ「知るギャラリー」2025年12月19日公開記事

クリスマスと言えば、世界中にプレゼントを届けるサンタクロースの労働環境にも異変が生じている様子です。CNNによると、サンタクロースの故郷として知られるフィンランド北部ラップランド地方のトナカイが次々とオオカミに襲われ、危機に直面しているといいます。隣接するロシアでオオカミが急増し、越境してくるためとの見方が強い。フィンランド天然資源研究所によると、ここ数年でオオカミが急激に増加。昨年春の推定295頭から今年は同430頭と、過去数十年で最も多い数を記録。トナカイ農家組合によると、オオカミに殺されたトナカイは今年だけで約1950頭に上り、昨年より70パーセント近く増加。その原因として、フィンランドで最も有力なのは、ロシアのウクライナ侵攻に原因があるという説。この説によれば、ロシアのオオカミが国境を越え、フィンランドでトナカイを襲っているという。ロシアでは健康な男性が戦闘に動員され、その中には猟師も含まれており、オオカミの狩猟が減った。結果としてクマやオオヤマネコ、オオカミが爆発的に増え、トナカイを餌食にしていると考察。トナカイの放牧をする農家は、自身の土地から約40キロというロシア国境の方を指差し、「かれらは今ウクライナで人間を狩っているから、オオカミを狩る人手が残っていない」と語った。

タクミが日本で初めて安定稼働に成功して全国展開している超小型木質バイオマス発電システム「VOLTER」はフィンランド製。運送業を営むトナカイ株式会社の人手不足により、タクミへの配達に遅延が生じている状況です。今季は代替輸送として船便で配達される見通し。一刻も早いロシアとウクライナの和平交渉の成立とクリスマスで勝負に出た部下の成功をオフィスから祈るクリスマスです（笑）